

して一見の母でもありとにかくなんとかやってゆけるのは、同期に入った連中と常に話し合ったり励ましあったりしていることがその最大の理由と思えます。こうした職場の人間関係の良さは（それは自分達自身でつくるべきものでもあります）他の職場に比し素晴らしい長所だと思われれます。現在私達は日本におけるマリッジカウンセラーの草分けとなるべく勉強していますが、勿論職業として割切らねばならぬ面も多く、夢が大きいと失望も大きく、しいては長続きしない原因となることを経験した上でのことで遅々とした歩みです。私等の前にも多くの女性が各々のやり方で気長に努力して家庭と仕事を両立させておいでになるし、私達もその様にありたいと毎日自分に言いさかせています。新鮮な感覚と才能をもたれた皆様が入っておいでになることを大いに歓迎いたします。

一人立ち四年目のつぶやき

大 江 和 子

ただいま6月6日午後4時の分、日本航空のD.C.-7C旅客機が羽田から伊丹へ向って飛び立ちました、その中に乗っている、ひとりの色の黒い、眼の鋭い、50才を少し出たぐらいの、背は高くないががっしりしている紳士が私を秘書として使っている常務です。

これから1週間が私の思ぬき期間——他人様本位の毎日に明け暮れているとこの様な時こそと、あれもこれもやりたいことだらけで貧しい頭の中はいっぱいになってしまいます。業務の出張をこんな心持ちにしていると、あまり立派な秘書ではありませんが——。

広告代理店という、とてつもなくめまぐるしい世界に飛び込んで三年余、ただ一生懸命頑張ったという以外、いったい自分が何を得てどれだけ進歩したのか、落着いて考えたこともない有様です。『あゝいう会社は、あなたにはどうかしら』と首をかしげられる先生方の前で『大丈夫です』と豪語して意気揚々入社式に臨んだのも、もうそんな前になるのかと感慨を新にしながら過ぐる年月を振り返ってみました。

私はコピーライターとして入りましたので三年余の博報堂生活の前半は制作者としての活動に終始しました、コピーライターといえは「江分利満氏」などによって今では遍く知れ渡ってしまった職業ですが、私の入った頃は一般にもの珍しく、私自身もこんなものとは知らないで、ただ働きに働いてみたい思いで選んだ職場でした。

コピーライターというのは俗にいう広告の文案家のことですが「スカッとさわやかユカコーラ」だけを作っているわけにはゆきません、商品研

究はもとよりのこと市場調査や消費者調査によるデータと取組み、そこから出てくるアイディアに基いて文案を練り視覚表現を考え、デザイナーと打合わせ、カメラマンと打合わせ、原稿が完成するまで、気をやめることができないのです。

広告の素材を求めて漫画家にも会いました。スチュアデスにも会いました。作家のサインを貰ったりしました。撮影のために飛行場に行ったり、公園に行ったり、赤ちゃんを待ち構えて保健所に行ったりよい写真を撮るためには、子供と一緒に泥んこ遊びもしました。季節はずれに背負い簍いっぱいトマトを探し求めて泣きそうでした。ホテルの調理場に出かけて行き必死の思いで特大のローストビーフに注文をつけました。汗をだらだら流し乍ら、モデル嬢の脚のシームラインを直しました。出ないアイディアを絞りますのに半泣きの徹夜も何度も、でも出来た原稿を抱えて、クライアント（得意先）へ乗り込んでゆく時には戦場に出てゆく様なファイトを燃やしていました。

ディレクターとかプロデューサーとか云えば聞えがよいのですが、コピーライターはアイディAMANであると同時に広告原稿が完成するまでの雑役夫でもありました。しかし兎も角、この頃は学校生活から社会生活への転換期に加えて、なすことのすべてが新鮮でおもしろく、雨の日も灼熱の日も夢中で飛び歩き会議に出席し、コピーを書き、小道具を集め撮影に立ち会い、クライアントのイシアタマ加減を歎き乍らも情いっぱいの日を送っていました。忙しい商売には違いありませんが、与えられた時間と自己の責任内で力の限り仕事を処理してゆくことには格別の楽しさがあり、苦心の作品が新聞や雑誌で装いも新に掲載されているのを見ると、次の仕事への新しい意欲が自と湧き上って来たものです。

さて、およそ二年経った頃、仕事はがらりと変わりました。それが現在やっている秘書というものです。常務は私が入社した当時の制作部長であり、勿論現在でも博報堂で最高の地位にあるアートディレクターですから私も相変わらず、コピーとかデザイン、レイアウトなどということばに囲まれてはいますが、現在はもう制作者ではなく、博報堂中の全制作者を指揮し監督しているディレクターのアシスタント。簡単に申せば何でも屋です。原稿書きからお茶出しに至るすべての雑用・・・どうぞご想像下さい。

思うに秘書業務とは、常務を機関車に例えればその機関車を最高のスピードと最高のコンディションで、しかも事故なく目的地まで先導する「レール」と同じようなものです。

レールの敷き方如何で機関車は転覆したり、立往生したりするでしょう。ど

うしようもない衝突も立体交叉という手で避けられるでしょう、つまり仕事の方向づけによって煩雑さを取り除き、働きやすいコンディションを創り出してゆくことができるわけです。そのためには自我を抑えたり殺したりしなければならぬこともしばしばですが、物事を処理する方向を決める瞬間瞬間には自己の間違ったのない判断力が強く要求されるのです。

「勿論レールを敷くには機関車を知らねばなりません。この仕事を始めて、もう一年になろうとしています。常務の思想と物の考え方を理解するのに、考え過ぎてくたぐたになってしまうことがあります。何をして欲しいのか、何をして欲しくないのか、誰に会いたいのか、誰には会いたくないのか、つねに相手の気持ちに一步先んじて先へ先へ仕事を進めてゆくこと、これは私の場合に限らず、どこの職場に於ても上司に対する礼儀と心得てよい大切なことだと思います。

「完璧とはゆかないまでも、少くともよい秘書になろうとすればする程突き当たる問題も多く、時にはレール敷きにくたびれ果て、逃げだしたいとも思いますが、会社中で最も尊敬している人の仕事を及ばず作ら助けているというささやかな誇りを新しいエネルギーの源泉と出来ることはしあわせです。相手の立場、仕事の性質に鑑みて、自分がどうあらねばならないかを、敬しく反省しなければならないのも今の私にはよいことだと思います。

では地理科出身ということが何かプラスになっているかと問われれば勿論「イエス」と答えます。なぜならば地形も地質も気候も、直接には何の関係もない毎日ですが、原稿を制作するために見聞をひろめてゆく過程に於て欠かすことのできない適性、更に現在では仕事の上でもヒューマンリレーションの上でも私を動かしている物の考え方の根底にあるもの、これらはすべてあのかけ代えのない4年間に培われたものに他ならず、中文科でも史学科でもない地理科の卒業生であることを秘かな誇りとして毎日の勤めにいそしんでいる私なのですから。

二年目の感想

大 田 美 也 子

卒業してからはや一年余りたちました。学生時代およそ勉強せず、研究室にも馴染みがうすかった様ですが、今頃になってお茶大のほこりっぽい教室が懐しく思い出されています。「教師としての立場から、何か一言という御依頼でしたが、まだ「教師」というには余り未熟でありまたそう呼ばれることをどうも好まないのですが、近頃感じていることなどを思いつくまゝに述べることに致します。